

建内宿祢の訓について

博士後期課程 山口 直美

はじめに

『古事記』の建内宿祢は、成務・仲哀・応神・仁徳の四代の天皇に仕えた忠臣として描かれている。また『日本書紀』では「武内宿祢」として景行・成務・仲哀・神功・応神・仁徳にわたり仕えたと記されている。

建内宿祢の研究は、伝承の成立時期や、後裔氏族の検討など、様々なアプローチがなされてきたが、ここでは訓の問題を取り上げる。

現行のテキスト、諸注釈、辞書類をみると、建内宿祢には「タケウチノスクネ」(「タケシウチノスクネ」)、「タケノウチノスクネ」というように複数の訓みが併存していることに気がつく。また、『古事記』と『日本書紀』においても異なる訓が採用されていることもある。

本稿では建内宿祢の訓の検討を通して、明治期以降の『古事記』の研究史について考えていきたい。主に『古事記』の諸注釈を取り上げるが、付随して『日本書紀』の訓も適宜確認する。

1 諸本の確認

まずは『古事記』の諸本において、どのように訓まれているかを確認する。建内宿祢の名は、『古事記』に十四例ある。これを文の順番通りに①から⑭まで番号を振り、【表1】にまとめた^①。

内訳は、孝元天皇条に二例(①②)、成務天皇条に一例(③)、仲哀天皇条に六例(④⑤⑥⑦⑧⑨)、応神天皇条に三例(⑩⑪⑫)、仁徳天皇条に二例(⑬⑭)、の計十四例となる。表の右の列に、天皇代と該当する説話、番号を記し、二列目以降、同じ形式で諸本の例を一覧にした。一行目には、諸本を略称で示した。

『古事記』の諸本は伊勢本系統と兼永本系統があり、現存する最古の写本である真福寺本(伊勢本系統)は無訓点本のため外している。一覧の諸本は兼永本を頂点とした兼永本系統に属している^②。

梵	猪	曼	前	春	兼	
建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	② ① 孝元（系譜）
建内宿祢	建内宿祢	建内宿祢	建内宿祢	建内宿祢	建内宿祢	③ 成務（大臣）
建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	⑤ ④ 仲哀（託宣）
建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	⑦ ⑥ 仲哀（託宣）
建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	⑨ ⑧ 仲哀（名易酒薬）
建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	⑪ ⑩ 応神（髪長比売）
建内宿祢	建内宿祢	建内宿祢	建内宿祢	建内宿祢	建内宿祢	⑫ 応神（造池）
建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢		建内宿祢 建内宿祢 建内宿祢	⑭ ⑬ 仁徳（雁卵）

【表 1】

一行目の諸本の略称は次の通りである。

兼…兼永本（鈴鹿本）

春…延春本

前…前田本（祐範本）

曼…曼殊院本

猪…猪熊本

梵…梵舜本

諸本をみると、〈タケウチノスクネ〉とする訓が必ずあることがわかる。訓がない部分は、省略されたか〈タケシウチ〉〈タケノウチ〉としていた可能性はあるが、確かな例は見当たらないことを留意しておく。

続いて刊本を確認する。『寛永版本古事記』（二六四四年）では、表でいう孝元天皇条②に該当する、一例のみ「建内宿祢」つまり〈タケノウチ〉がとられている点に注意される。『鼈頭古事記』（度会延佳一六八七）は〈タケチノスクネ〉を採用している。林勉氏が指摘しているように、仮名日本書紀を踏まえていると推測できる。この訓は引き継がれることはなかったようである③。『訂正古訓古事記』（本居宣長一八〇三年）として『校訂古事記』（田中頼庸一八八七年）は統一して〈タケウチノスクネ〉としている。

以上をみると〈タケウチノスクネ〉が最も可能性が高い訓と推定される。訓が記されていない部分があるが、古本を見ると〈タケシウチ〉もないが、〈タケノウチ〉も該当するものがないことが確認でき、〈タケノウチ〉も『古事記』の研究史では寛永版本で取られた、比較的新しい訓

だと考えられる④。

また、林勉氏の調査によれば『日本書紀』の諸本を検討した結果、無訓点ならびに訓の省略があるので〈タケシウチノスクネ〉とある可能性はあるが確実な例はなく、比べて北野本には〈タケウチノスクネ〉とあり、他の諸本もこれに習う部分が多いと指摘している。『釈日本紀』にも訓は確認できない。

従って〈タケウチノスクネ〉と訓むべきであり、『古事記』においても〈タケウチノスクネ〉とすることが示されている⑤。このように諸本では〈タケウチノスクネ〉とされていた可能性が高い。それでは、〈タケシウチノスクネ〉という訓はいつ頃登場したのだろうか。

2 諸説の整理

諸注釈、辞書類には、〈タケウチノスクネ〉〈タケシウチノスクネ〉のどちらの訓も確認できる。建内宿祢の訓について、『古事記伝』では次のように言及している。

【資料1】本居宣長『古事記伝』（本居宣長全集）

建内は多祁宇智タケウチと訓べし。（世に此ノ名を、武之内と、之を添へてよむは、古事をしらず、後世竹ノ内と云ふ地名のあるにならへる、みだり言なり、

古へに建之と云る例あることなし）建は美称、内は味師内の内と一つにて共に居する地の名にて、大和国有智郡これなり。

〈タケウチ〉とすることが正しいとした上で、〈タケノウチ〉に言及があるのは、寛永版本にこの訓があるためだと考えられる。また、宣長

は「タケシウチ」とする説は考慮に入れていないことから、まだこの訓を取る説がないものと推測できる。先に挙げた宣長が校訂した『訂正古訓古事記』、またそれを引き継いで整理された『校訂古事記』もこれに従っており、基本的に、宣長の説が踏襲されていると考えてよいだろう。一方で「タケシウチノスクネ」とする説を調べた限りでは初出は次の通りである^⑧。

【資料2】伴信友「建内宿祢の名の唱」『比古婆衣』三卷

建内宿祢の名は兄を味師内宿祢と称へる味師に対へたる美称にて、
タケシウチノ
 多祁志宇智宿祢と称ひしなるべし。其はまづ古事記に兄の名を味師とある
 を書紀には甘美と書き姓氏録には味と一字と書るをおもふに宇麻志の志
 は甘美の活語なる事著し、弟の名も同じさまに相對へて多祁志と唱へるに
 建字を当て書るなり

『比古婆衣』は伴信友の記した随筆集で、弘化三年に信友が死去した後、弘化四年（一八四七）に二冊、文久元年（一八六一）に二冊刊行され、残りは伴信友全集第四巻に収められ明治四〇年（一九〇七）に刊行された。信友は本居宣長に感銘をうけて宣長の死後門人となったことは周知の事実である。宣長の研究を熟知した上での説といえるだろう。建内宿祢の兄である味師内宿祢（『日本書紀』では甘美内宿祢）は「ウマシウチノスクネ」とあり同じ美称でもあるので対として訓めると考えたのだろう。この説は、『古事記』ではないが次のような批判もされている。

【資料3】飯田武郷『日本書紀通釋』（一八九九）

（記伝の説を記した後、）近頃また多祁志宇智と訓り。此は宇麻志内と對へて。宜しきか如くなれど。しか訓たる例古書になし。甚しきひかことなり。
 「ウマシウチ」とする例は古書になく、誤りであると指摘してる。だが、「ウマシウチ」に対して「タケシウチ」がよいとする考えは、

【資料4】池辺義象『古事記通釈』（一九一一）

味師内に対してタケシウチと訓むかたよし

とあるように、広く認知されたようである。これ以降の昭和初期は、数では「タケシウチノスクネ」が多く採用されている^⑨。

これは『国史大系 日本書紀』（一八九八）『国史大系 古事記』（一八九九）に「タケシウチノスクネ」が採用されたこと、武田祐吉、土橋寛をはじめ多くの研究者が「タケシウチノスクネ」の訓を採用したことが影響していると考えられる。

【資料5】武田祐吉『記紀歌謡集全講』（一九五六）

孝元天皇の皇子、比古布都押の信の命の子、兄弟に味師内の宿祢があり、その名と対するものとして、タケシウチノスクネと読まれる。ウチは、大和の国の有智の地名によるとされるが不明。この人は、長命で、仲哀・応神・仁徳の三朝に仕え、権勢のある時代が長かった。それで子孫が繁昌して、蘇我・石川・巨勢・紀等の大族が出た。従ってこの人、およびその子孫の關係する歌物語も多い。

その後刊行された、古典文学大系シリーズ（岩波書店）では以下のよう
 に言及されている。

【資料6】土橋寛校注（日本古典文学大系『古代歌謡集』（一九五七）

建内（たけしうち）の宿祢（すくね）のこと。タケシは美称。ウチは大和国・有智郡の地で、そこを本貫とする氏。兄を味師（うまし）内の宿祢という。

【資料7】倉野憲司校注（日本古典文学大系『古事記祝詞』（一九五八）

ウマシは可美で美称、内（ウチ）は大和国・有智郡に因んだ名で、建内の内も同じ。宿祢については紀伝に、古はただ臣たちを親しんで言った呼び名で、姓のカバネになったのは、天武天皇の御世からであると説いている。

【資料7】にあるように『古事記・祝詞』は「タケウチノスクネ」を採用しているが、【資料6】『古代歌謡集』では古事記歌謡とともに日本書紀歌謡の段についても「タケシウチノスクネ」としている。また『日本書紀』（一九六六年）では訓についての注記はないが「タケシウチノスクネ」としており、シリーズの中で統一されてはいない。古典文学大系シリーズと同時代に刊行された他の注釈書では「タケシウチノスクネ」が多く採用されていた^⑧。その後は古訓に例がない点や、文法上の問題から「タケウチノスクネ」とするのが一般的になっていった。

【資料8】西宮一民『古事記 修訂版』（二〇〇〇年初版・一九七三年）

「味師内宿祢」とあり、これをウマシウチのスクネと訓んだ。ウマシは形容詞シク活用の語幹。すると、ここの「建内宿祢」も同じ構成と見るならば、タケシ（ク活用）の語幹タケ、そしてウチのノスクネと訓むことになる。従って、タケシウチのスクネまたはタケのウチのスクネとは訓まない。

【資料9】倉野憲司『古事記全注釈 第五卷 中巻上』（一九七七）

建内はタケウチと訓む。タケシウチまたはタケノウチとは訓まない。

【資料10】西郷信綱『古事記注釈 第三卷』（一九八八）

タケシウチとも訓めるが（紀は武内宿祢）、上に味師内とあるのでタケシウチなら建師内と書きそうな気がする。それに建や武一字をタケシと訓む例は記にはないようである。

【資料11】神野志隆光（新編日本古典文学全集『古事記』（一九九七）

この人物は、成務朝から仁徳朝に至る歴代に仕えた長寿の人として描かれている。なお「建内」をタケシウチと読む説があるが、形容詞タケシ（猛）はク活用であるから、タケウチとしか読めない。タケシウチの読みは、前出の「味師内」に類推して後世作られた形。ウマシ（美）はク・シク両活用あり、ウマシウチの形もありうる。

【資料8】は初版から何度か改訂を重ねて出版されているが、訓については一貫して「タケウチノスクネ」を採用している。辞書類を除くと、二〇〇〇年代以後刊行されたテキストを調べた限りでは「タケシウチノスクネ」を採用しているものは見当たらなかった。以上確認してきたように、諸本を踏まえると「タケシウチノスクネ」ではなく、「タケウチノスクネ」とするべきである。【資料8】【資料11】が指摘するように文法上の問題からも「タケシウチノスクネ」とするのは難しい。以上の点から「タケウチノスクネ」と訓むべきであろうと考える。

3 国史大系本古事記と谷森善臣

諸本の検討及び文法的な側面から「タケウチノスクネ」と訓むべきであると確認した。しかしながら、今日においても『日本国語大辞典』で

は「タケノウチノスクネ」とし、『国史大辞典』では「タケシウチノスクネ」とする現状がある。この問題を考えるうえでは、『国史大系古事記』ならびに『国史大系日本書紀』の影響を考慮しなければならない。『国史大系古事記』、『国史大系日本書紀』後に刊行された『新訂増補国史大系古事記』は建内宿祢を「タケシウチノスクネ」と訓じている^⑨。『国史大系古事記』について「校訂本として最も完備している。」^⑩という指摘もあるように当時から信用度の高いテキストと位置づけられ、現在も本文引用に適したテキストとされていることは言うまでもないだろう。

国史大系は、明治三〇年（一八九七）に『日本書紀』の刊行からスタートした日本史資料叢書である。『古事記』は明治三二年（一八九八）に刊行され、その底本については凡例に次のようにある。

古事記は故伴信友山田以文山根輝實諸大人が尾張国真福寺本慶永年間古写の伊勢本其他諸本を以て比校せしものを谷森善臣翁の更に増補校訂せる手校本二部及び秘閣本等に拠りて古訓古事記に標註訂正を加へたり且つ古事記伝の説を掲げ欄外にはその巻数を加へて同書を読まん人の便に供せり。

（国史大系 第七卷『古事記』経済新聞社一八九八年）
右に名前のある谷森善臣とは、本名は種松、文化十四年（一八一七）十二月二十八日、京都に生まれ、明治四十四年（一九一一年）十一月十六日に没した国学者である。谷森の業績は、林惠一氏「谷森善臣著作年譜抄」に詳しい。『国史大系古事記』の底本に採用された校訂本だが、今日あまり注目されてこなかった背景には、「著作・蔵書は一括されて

谷森家から献上されてしまった」^⑪ためではないかとされる。

谷森の校訂した古事記は、国史大系に採用されるなど、今日の研究に多大な影響を与えている。青木周平氏の調査に拠れば、宮内庁書陵部蔵の谷森善臣の『古事記』校訂本は四本（谷一五四、谷一六〇、谷一六五、谷一七〇）あり、そのうち一本が自筆校訂本（谷一七〇）とある^⑫。前述の国史大系の二本はどの本を指すか明らかではないが、後刊行された、『新訂増補国史大系 古事記』（一九三六）ではさらに複数の諸本を加えて校合した旨を次のように記している。

谷森翁校訂本は二部より成る、一部は寛永二十一年板本を底本して、これに真福寺本、曼殊院本、醍醐殿本、鈴鹿連胤本等を忠実に校合せる校本にして、一部はかくして成れるものによりて新に校訂本を作り、嘉永七年自ら浄書せられしものなり。而してその後なほ古写本の校合を継続すると同時に校訂本の改訂に従事せられ、遂に未定稿として世に遺されしものなり。未だ世に印行を見ずと雖も数十年の努力に成れるもの、本書を校勘するに当り亦古事記伝と共に最も多く之を参考せり。

（新訂増補国史大系第七卷『古事記』吉川弘文館 一九三六年）
ここにある二本うちの前者が谷一六〇で、後者が自筆校本の谷一七〇あたるといふ。青木氏は、善臣は底本として用いた『訂正古訓古事記』寛永版本を含めて、十七本のもの古事記を調査したと指摘しており、その集大成が（谷一七〇）の自筆校訂本となる^⑬。そしてこの中には伴信友校本とされる一本も含まれる。

谷森善臣が伴信友に国学の教授をうけていたことは、よく知られてい

る。青木氏は谷森が信友の死去した弘化三年十月に、『古事記』の校合をはじめていることから、「善臣に、信友の研究を引き継ぐ意志があったとしても何ら不思議ではない。」^⑭と述べている。信友の全集本の刊行については谷森も尽力したこと、諸本をかなり所持していたことも指摘されており、師弟として両者の関係の深さは言うまでもない^⑮。

信友が『比古婆衣』を出版したのは弘化四年（一八四七）以降だが、それより以前にその説を踏襲していた可能性が十分にある^⑯。『国史大系古事記』の凡例には、校訂を加えた場合諸本の略称を示すとある。しかし建内宿祢の箇所には略称がないことから、谷森の校訂本で「タケシウチノスクネ」が既に採用されていたとも推測できる。

また、『国史大系日本書紀』も同じように「タケシウチノスクネ」が採用されているが、凡例では、底本を「小中村清矩が安政の頃内藤廣前の校本を以て異同を註されしものに拠りて寛文の板本（流布本）に標註を加え傍ら日本紀通証書紀集解等二三の書を参考して校訂せり。」^⑰とある。参照したテキストの中に古事記があり、何に拠ったかは書かれていないが、『国史大系本古事記』の底本となった谷森本である可能性はあるだろう。谷森の校訂について、準拠諸本、校合の姿勢等を調査した青木氏は、いまだ検討を要する点が多いとしながらも

善臣の訓は、多く出典を明記しない。したがって、原則として色分けて表示する書き入れ本をみても、判然としないことが多い。自筆校訂本（谷一七〇）の訓も、何に主として拠ったかは明記しない。しかし全体を通読すれば、宣長の『訂正古訓古事記』に最も近い印象を持つ^⑱。

と述べている。また出典研究は未だ不十分であることも言及している。宣長の研究とともに、伴信友の研究の影響も改めて検討するべきものであると考える。

おわりに

本稿ではテキストにおける建内宿祢の訓の問題から出発し、「タケウチノスクネ」と訓むべきであることを確認した。それと並行して、「タケシウチノスクネ」という訓の出所と、その訓みがどのように研究に引き継がれてきたかを明らかにした。そして、『国史大系本古事記』の底本の問題へと辿り着いた。この本は青木氏により調査がなされたが、「明治以後のテキスト・注釈書類はほとんどの本が宣長説を継承する。その中で、僅かながら善臣説を伝えるのが「旧輯国史大系」及び「新訂増補国史大系本」である。」^⑲とし、幕末から明治の『古事記』研究において優れた点が多いとしている。

谷森善臣は、建内宿祢の訓を「タケシウチノスクネ」とする信友の説を継承したと推測できる。伴信友は、数多くの著作を残しているが、古事記研究において大きな注目を集めてきたとは言いがたく、その影響について詳細な検討はされていない。今後は、伴信友校訂本の検討や谷森善臣校訂本との比較等をすすめる、研究史上の位置づけを考える必要があるだろう。

〈注〉 諸注釈については本文に記載した通りである。引用は新字に改めた箇所がある。

①【表1】は以下を参照し作成した。

小野寺光雄『諸本集成古事記』勉誠出版 一九八一年

倉野憲司他編『校本古事記』群書類従完成会 一九六五年

西田長男解題『卜部兼永筆本古事記』勉誠出版 一九八一年

前田育徳会尊経閣文庫編『古事記』八木書店 二〇〇三年

『梵瞬本古事記』國學院大學図書館デジタルライブラリー

②諸本並びに版本については、注(1)の他に以下を参考にした

澤瀉久孝・濱田敦「古事記諸本概説(上)(下)」『帝国学士院紀事』四卷二号・

三号 一九四六年

古賀精一「古事記諸本の研究、次田潤「古事記の版本」(ともに『古事記大

成一 研究史篇』平凡社 一九五六年に所収)

鈴木啓之「真福寺本古事記の成立と伝来」『古事記研究大系二 古事記の研

究史』高科書店 一九九九年)

③林勉「日本書紀訓読三題―「武内宿禰」「難県・難河・那津」「向津国」―『古

代史論叢上巻』一九七八年 吉川弘文館

なお、林氏の論文では、①『古事記』の建内宿禰の例は十三例とするが正しくは十四例である。②神功記の例はなく正しくは仲哀記を指す。③諸本について(春)を春璣本とするが『諸本集成古事記』に拠れば延春本を指している。上記三点を訂正する。

④武内宿禰を祭神とする、宇倍神社(鳥取県鳥取市、因幡国一宮)では(タケノ

ウチノスクネ)としており、信仰や口承では(タケノウチノスクネ)が根付いていた可能性がある。また、人名・地名では(タケノウチ)の形がある。本稿では諸本の訓を問題とするため、この点は別途検討する。

⑤林勉氏前掲論文では、「日本書紀の古い諸本では「武内宿禰」は「タケウチノスクネ」と訓むのが極めて有力であり、「タケシウチノスクネ」も可能性はあるが確かな例は一例もない。「タケノウチ(ノ)スクネ」は極めて少例ながらあるが、可能性も少ないといえる。」としている。

⑥荷田春満(書入本古事記『新編荷田春満 全集 第一巻』おうふう 2003年)、賀茂真淵(真淵書入 古事記『賀茂真淵全集 第二六巻』続群書類従完成会 一九八一年)ともに(タケウチノスクネ)としている。

⑦林勉 前掲論文

⑧(タケシウチノスクネ)と訓じる例の一部を挙げると、次の注釈書がある。

・神田秀夫・太田善麿校注 日本古典全書『古事記』朝日新聞社 一九六二年

・丸山二郎『標注訓読古事記』吉川弘文館 一九六五年

・尾崎暢映『古事記全講』加藤中道館 一九六六年

⑨新訂増補 国史大系第一巻『日本書紀』(吉川弘文館 一九二九年)では北野本の訓である(タケウチノスクネ)を採用し、国史大系『日本書紀』から変更している。

⑩次田潤「古事記の版本」『古事記大成一 研究史篇』平凡社 一九五六年

⑪林恵一「谷森善臣著作年譜抄」『書陵部紀要』第二三号 一九七一年

⑫青木周平「谷森善臣の古事記校訂研究」『青木周平著作集 古代文献の受容史研究』(初出「谷森善臣の古事記校訂研究―幕末から明治の古事記研究の一環

として―』『維新前後に於ける国学の諸問題』國學院大學日本文化研究所 一
九八三年)

⑬ 青木周平 「谷森善臣の古事記校訂研究 補説」『青木周平著作集 古代文献の
受容史研究』(初出「谷森善臣の古事記校訂研究―嘉永七年写校本の市―」『國
學院大學日本文化研究所報』一八一六 一九八二年)

⑭ 青木周平 前掲論文(注⑫)

⑮ 川瀬一馬 「伴信友の業績」『伴信友全集 別巻伴信友研究篇』ぺりかん社 一
九七九年

⑯ 『比古婆衣』の写本や出版状況は「伴信友著撰書目録稿」『伴信友全集 別巻
伴信友研究篇』ぺりかん社 一九七九年に拠る。

⑰ 国史大系 第一卷『日本書紀』經濟新聞社 一八九七年

⑱ 青木周平 前掲論文(注⑫)

⑲ 青木周平 前掲論文(注⑫)